

原 著

## 栃尾郷病院における家族立ち会い分娩の実際と評価

栃尾郷病院 助産婦

小林 清美、田村 美幸、坂井 祐子、棚村 美枝子

栃尾郷病院 看護婦長

伊藤 ハナ子

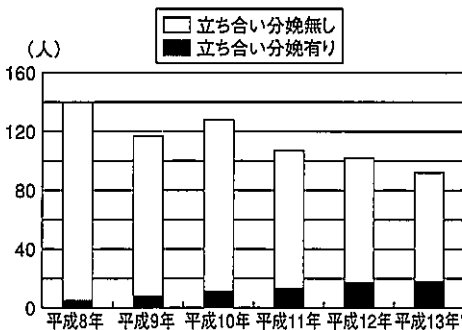
### 1. はじめに

近年、晩婚化・少子化の進む中で、数少ない分娩の機会に自分の納得する分娩を希望する妊婦やその家族がふえている。このような傾向のなか、当院では、平成元年頃より立ち会い分娩を行っている。当初は数少なかった立ち会い分娩希望者も、最近では増加傾向にある。そこで本稿では、まず当院での立ち会い分娩の現況として最近の数年間の立ち会い分娩数を示し、次に立ち会い分娩の外来管理から入院分娩に至るまでの実際を概説する。その上で、今回その評価を目的として平成13年4月から8月までに立ち会い分娩を経験したご夫婦にアンケート調査を施行した結果、多くのご夫婦に希望にそう満足のいくものであったことがわかったのでここに報告する。

### II. 当院における立ち会い分娩の実際

#### ①最近5年間の分娩件数と立ち会い分娩数

当院での立ち会い分娩は、平成元年頃より希望する夫婦の立ち会いを機に少しずつ始められた。平成8年から12年までの当院の分娩数と立ち会い分娩の比率を図1に示す。平成8年では総分娩件数141件に対し立ち会い分娩件数は6件(4.3%)であったのに比し、平成12年では総分娩数102件に対し立ち会い分娩件数は17件(16.7%)と増加傾向にあり、平成13年も同様な傾向を示している。



\*平成13年は1月から9月までの分娩数

図1 最近5年間の分娩件数と立ち会い分娩件数の割合

#### ②立ち会い分娩の実際

立ち会い分娩の希望の妊婦さんには、母親学級や通常の妊婦健診の際にその旨申し出てもらうこととしている。また、立ち会い分娩は夫婦の合意のもと自発的な希望であることを確認している。立ち会い分娩希望者に対しては分娩前に、助産婦と個別面談の機会をもつことを原則としている。その際には、立ち会い分娩を行う上での注意事項や、分娩時の夫の役割、異常時の対応などにつき説明し、再度立ち会い分娩の意思を確認している。陣発後分娩第1期は、陣痛室にて家族とリラックスして過ごしてもらう。分娩第2、3期は、マスクとガウンを着用し、産婦の頭側に位置してもらい産婦と同様な視線で分娩進行を見守れるよう配慮している。分娩経過中に異常が発生し、産科的処置が必要な場合や、分娩終了後会陰縫合の時には一時的に退出していただいている。分娩終了後2時間は分娩室にて過ごしていただいている。

### III. 当院における立ち会い分娩の評価

#### ①目的

立ち会い分娩が御夫婦に満足のいくものであったか、また問題点の有無など、立ち会い分娩の現況について客観的に評価し、今後の臨床に生かすことを目的とした。

#### ②研究対象と方法

平成13年4月から8月までの期間に当科で立ち会い分娩を施行したご夫婦を対象とした。期間中の総分娩件数は56件であり、このうち立ち会い分娩件数は12件であった。12件の立ち会い分娩はすべて正常分娩であった。研究方法は郵送又は手渡しによるアンケート調査とした。12件のうちアンケート調査にご協力いただけたのは10件で回収率は83.3%であった。10件の背景は県外からの里帰りが6件あり、初産婦5件、経産婦5件であった。

#### ③アンケート調査の内容

アンケート調査の内容は表1に示した通りである。各項目については夫及び妻両者にそれぞれ別個に回答をしてもらった。一部項目は夫のみに回答してもらった。立ち会い分娩後の心境の変化については、夫へは自分が変わったこと、妻へは夫がどう変わったかという視点で回答してもらった。また、この項目とは別に自由なコメント欄をもうけた。

表1 アンケート調査内容

- ①立ち会い分娩してよかったか (夫及び妻)
- ②次回も立ち会い分娩したいか (夫及び妻)
- ③夫へのアンケート
  - I) 立ち会い分娩は誰に勧められたか
  - II) 何時から立ち会ったか
  - III) 立ち会い分娩に関する出産前教育は
- ④立ち会い分娩後の心境の変化 (夫及び妻)
  - I) 妻へのいたわり思いやり
  - II) 子供への愛情の変化
  - III) 家事育児への協力
  - IV) 性生活

④結果

立ち会い分娩をしてよかったか、次回も立ち会い分娩をしたいかについては、夫婦共に全例立ち会い分娩をしてよかった、次回も立ち会い分娩をしたいと回答している(図2)。立ち会い分娩の動機として、夫みずから決めたのは60%、妻に勧められたものは30%であった。何時から立ち会ったのかの問に対しては入院時から60%、分娩時のみが40%であった。立ち会い分娩の出産前教育は全例うけていなかったが、半数の夫が出生前教育が必要と回答した(図3)。立ち会い分娩後の心境の変化について、夫の回答としては、妻へのいたわりや思いやり、子供への愛情の変化、育児家

事への協力に関しては多くの人がアップしており、よい方向への心境の変化が見られたと答えている。性生活に関しては90%は変化無し、10%にダウンしたとの回答していた(図4)。妻へのアンケートとして、立ち会い分娩後に夫が変わったことを尋ねた結果は、夫の回答と同様な内容になっていた(図5)。自由記載のコメントでは、「分娩時ずっと付き添い、腰をさすってくれて陣痛が和らいだ。」「自由にさせてくれるのでよいと思います。」「とても親切で丁寧に接していただき感謝しています。」「些細なことも聞けるような環境で明るくアットホームでありがたかった。」「ずっと付き添って下さったので心強かった。安心して出産に望めました。」「助産婦さんのリードにより、とても安心して出産できました。」などのコメントがあった。多くの夫は感動したと答えており、妻の多くは安心して産めてよかったと答えていた。

IV. 考 察

当院では、平成元年頃より立ち会い分娩を開始し、施行錯誤のうえ現在に至っている。妊婦さんに満足のいくの納得できる分娩の機会を提供することの一つの手段ではあるが、近年立ち会い分娩件数が増加していることが示すとおり、地域の中で受け入れられ評価されているようにもおもえる。しかし、客観的に分析したことはこれまでなかった。そこで今回、より充実に

夫へのアンケート

妻へのアンケート

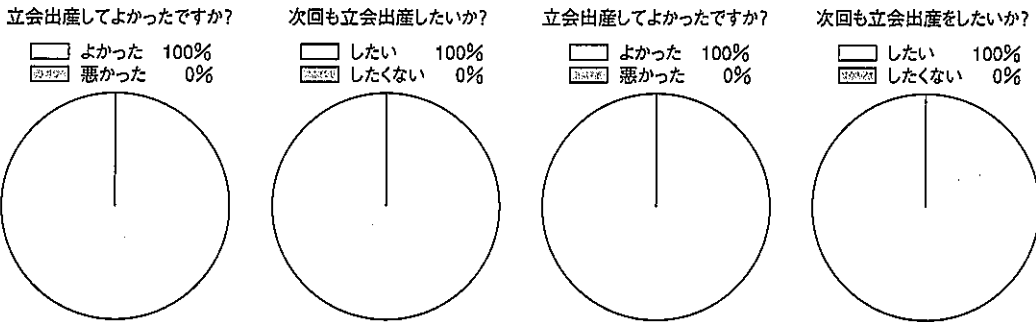


図2 立ち会い分娩をしてよかったか、次回も立ち会い分娩をしたいか(夫および妻)

立会出産を決めたのは?

何時から立ち会ったか?

立会出産の出生前教育は?

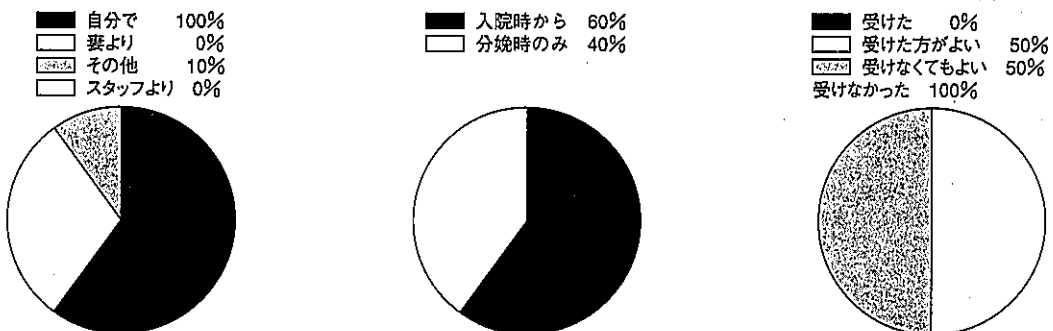


図3 夫に対するアンケート

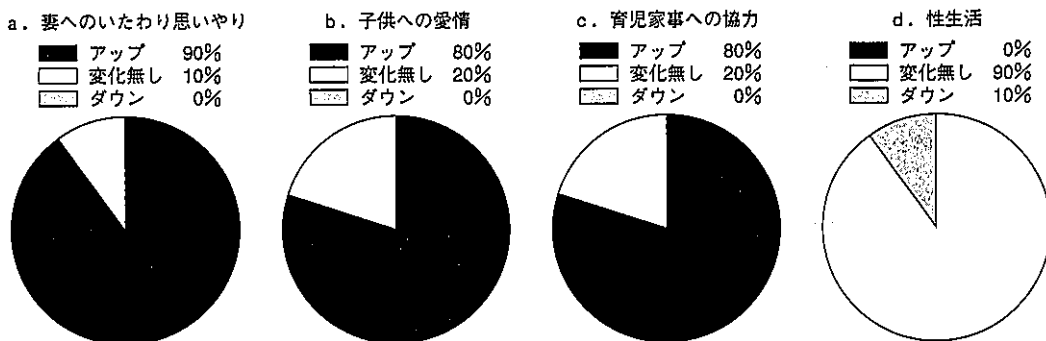


図4 立会出産後の心境の変化(夫の回答)

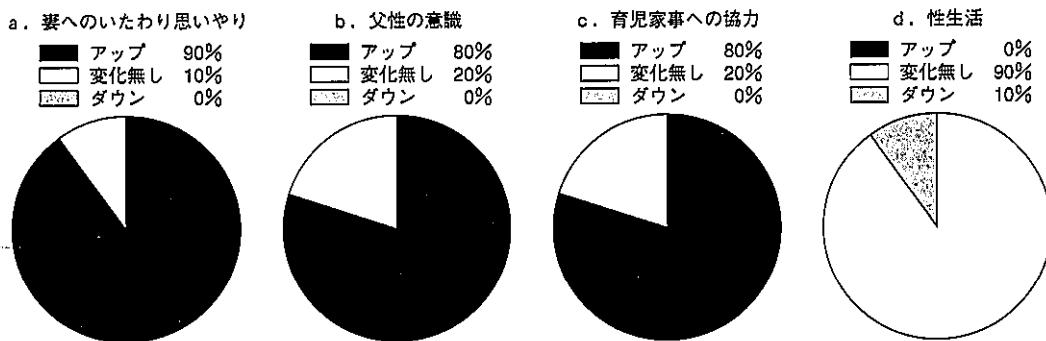


図5 立ち会い出産後、夫が変わったもの(妻の回答)

看護を提供するために、当院での立ち会い分娩の現状をまとめ、立ち会い分娩を施行したご夫婦にアンケート調査を行うことで当院の立ち会い分娩の評価を行った。

この結果、立ち会い分娩をしてよかったか、次回も立ち会い分娩をしたいかという問いについては、全例立ち会い分娩をしてよかった、次回も立ち会い分娩をしたいとの回答が得られた。今回アンケートに答えていただいた10組は正常分娩で以降の入院経過も母子ともに健康であり、正常な経過をたどり退院したケースであった。このために肯定的な回答が得られとも考えられるが、当院で行う立ち会い分娩がご夫婦の希望に添う満足のいくものであったと判断された。夫に対して行ったアンケートでは半数以上が自分で立ち会い分娩を希望し、入院時より付き添っており、立ち会い分娩に関して夫の関心が高いことを示している。本来立ち会い分娩を行うに際して、夫に直接出産前教育を提供することが理想的とされている。当院では妊婦本人には助産婦との面談の場をもうけて出産前教育を行っているが、夫への出席の強制は行っていない。当院でも出産前教育を考慮したこともあったが、受けたくても仕事の都合などで時間が取れないこと、また、里帰り分娩者が多いことなどで具体的には実現しなかった。また、近年ではインターネットや雑誌、テレビなどからの情報も豊富であり情報が十分与えられるものと判断していた。しかし、今回の結果、出産前

教育を希望する人が半数いることは、なお立ち会い分娩に対する期待とともに、不安も有ることを示しており、当科でも再検討してゆく必要があると考えられた。

立ち会い分娩後の心境の変化については、おおむねよい方向での回答を得ることができ、また、ご夫婦の回答は同様な結果となっていた。この結果は、妊娠中から立ち会い分娩を行うか否かを話し合い、実際に分娩に立ち会うことで、早い時期から出産に関わることで、夫としての自覚が目覚めやすいこと、また、夫婦の連帯感が強められることを示す結果であると考えられた。

充実した妊娠出産の機会を提供するための一つの試みとして開始した立ち会い分娩であるが、今回のアンケート結果では肯定的な結果であった。しかし、立ち会い分娩だけが解決策では無いこともあきらかである。

当院では今回のアンケート調査を行った平成13年4月より、助産婦が三交替制から日勤帯以外はオンコール制となった。この結果、助産婦が通常業務と別枠で、産婦に関わるようになった。一人の分娩は一人の助産婦が関わることになり、時間的にも精神的にもゆとりが生じた。三交替制の時には不十分であった援助を見直し、産婦に寄り添い呼吸法や、腰部のマッサージ、安楽な体位を勧めたりして、不安の緩和に努めてきた。援助が長期間になることもしばしばであった。

こうした状況の中で夫や家族と関わることで、よりよい人間関係を築くよう努めている。最近、夫婦が出産にこだわりを持ち主体的に取り組むケースでは、家庭分娩や助産所を選ぶようになってきている。当院のような、分娩数が少なくほとんどが正常分娩であるからこそ、助産所のような関わり方ができるといえる。

今回のアンケート調査は立ち会い分娩に関する調査であるが、自由記載のコメントにあるように立ち会い分娩のみならず当院でのこのような取り組み方も評価されたものと考えられた。

## V. おわりに

一人が経験する数少ない出産体験を、安全で満足できる体験にできたことは、私たちの喜びであり励みでもある。夫だけでなく、母親、子供、姉妹、友人が立ち会うことも増えてきている。さらに多様化する個々のニーズに応え応援してゆきたい。

施設の中で、安全管理と家庭的な雰囲気での自然分娩を目指すこと。また、施設の要素と助産所要素のバランスを保ちつつ、今後も産婦やその家族に喜ばれる援助を心がけて行きたい。

今回の研究をまとめるにあたり、アンケートに協力して下さいましたご夫婦の方々に深く感謝いたします。

## VI. 参考文献

- 1) 竹村英雄：家族中心のケア・アクティブバースの考え方と展開 p19-27, メディカ出版
- 2) 関根憲次：夫立ち会い分娩 今日産婦人科治療指針 医学書院・東京・320, 1969
- 3) 永井宏：立ち会い分娩の功罪 周産期医学・18/ (1): 47, 1988
- 4) 正木かよ：ラマーズ法による自主的自然分娩への

回帰、当院におけるラマーズ法の評価 ペリネイタルケア・8: 614, 1989

- 5) マーチン・グリーンバーグ：エングロスメントー父親に与える新生児のインパクトー ペリネイタルケア・13: 955, 1994

## VII. 抄 録

平成元年より当院では、立ち会い分娩を行っている。10年以上を経て、現状の把握と、今後の課題を見出すために、アンケート調査を実施した。

当院での、立ち会い分娩の現状と、外来管理から入院、分娩に至るまでの実際を細説する。

立ち会い分娩した、ご夫婦にアンケート調査を実施した結果、多くのご夫婦に希望に添う満足のいくものであったことがわかった。

キーワード：立ち会い分娩 出産前教育 自然分娩

Evaluation of family attendance childbirth in Tochigo Hospital

Tochio-Goh Hospital, Department of Delivery room  
Kiyomi Kobayasi, Yukie Tamura, Yuhko Sakai, Mieko Tanamura, and Hanako Itoh

It was our pleasure and encouragement that modern woman experienced less childbirths and wanted to be safe and satisfactory. Recently there increased cases in family attendance childbirth, which resulted in more variant attendants of mothers, children, sisters, and friends in addition to husbands. And we wanted to help their needs that became diverse in future.

Key Words: family attendance childbirth